

今冬、各普通科連隊の冬季訓練に付き合ったけれども、そのときの所感を二点。糠平湖から然別湖の峠越え夜間スキー行進時に見た満天の星空には思わず感嘆の声を挙げたほどであった。また、峠手前で視察を終えて出発点に戻る時、綺麗に整備されたとは言え、真っ暗な糠平スキー場をヘッドライトを頼りに官物のスキーで降りた。怖かったけれども、得難い経験であった。また、矢臼別演習場では、本当に20年ぶりに曳行スキー(ジョーリング:速度18km/h程度)を体験した。演習場には地吹雪が舞い、部隊訓練には絶好の天候であった。勿論このような天候気象を持ってきた小生に対し、連隊長から感謝の言葉が述べられたのは言うまでもない。帯広への帰隊時も地吹雪で白一色で全く視界がきかず、おっかなびっくりのドライブであった。不意に対向車が現れて驚かされた事も再三ならずだ。

さて、北海道に住んで、日常の生活の中でアイヌ民族を見掛ける事もなく、殆ど意識したことはないが、アイヌについて関心を持つべきだと思う。アイヌというのは、神(カムイ)に対する『「人間の意」である。かつては北海道・樺太(サハリン)・千島列島(クリール)に居住したが、現在は主として北海道に居住する先住民族。人種の系統は明らかでない。かつては鮭・鱒などの川漁や鹿などの狩猟、野生植物の採集を主とし、一部は海獣猟も行なった。近世以降は和人と交渉、特に松前藩の苛酷な支配と明治政府の開拓政策・同化政策により、固有の慣習や文化の多くが失われ、人口も激減した。口承文学ユーカラなどを伝える。』と広辞苑にはある。

アイヌについて述べるとなるとテーマが大き過ぎて、小生の手には余る。従って、アイヌ語で「シサム」と呼ばれる和人とアイヌとの抗争、戦いについて述べてみたい。

先住民族であるアイヌの住む北海道への和人の増加に伴い、狩猟と漁獲を主とし、鮭、鹿、海獣、その他を主食とし、野草を採取してこれを補い、草と木を材料として住居を作り、狩猟動物の皮を衣料として完全自給自足生活をおくり、独自の民族文化を保持していたアイヌの生活も大きく影響を受けざるを得なかった。そして松前藩や交易商人の横暴、搾取などにより、彼等の生活は著しく圧迫されるようになった。このような情勢下に、アイヌとシサムの戦いが惹起した。その中で、特に重要といわれているのが

- ① 1456年 コマシャインの戦い
- ② 1669年 シャクシャインの戦い
- ③ 1789年 クナシリ・メナシの戦い

の3つである。これらの一連の戦いはいずれも和人側の勝利となり、アイヌ民族の武力抵抗は終焉し、幕藩体制に組み込まれ、明治期を迎えた。そして、旧土人とされたアイヌは種々の差別を受けた。

事後曲折を経て、1997年アイヌ文化振興法が制定され、北海道旧土人法等は廃止された。正確な人口は不明であるが、道の調査(1993年)によると、約24,000人とされるが、実際の人口はその10数倍と推定されている。

● コマシャインの戦い

事の発端は意外につまらぬもので、極めて個人的な争いが、これ程、大々的且つ長期にわたる戦いになるなどとは到底信じられないのだが、アイヌの人にとっては、それま

での抑圧されたやり場のない怒り、反感、不満が渦巻いており、それが暴発するには、一寸したきっかけで十分だった。1456年（康正二）年春、箱館にほど近いシノリの村で、一人のアイヌの少年が、シサムの鍛冶屋にマキリと言う少刀を打たせた。ところがこの刀の切れ味、良し悪しをめぐる争いから鍛冶屋が少年を刺殺するという事件が勃発。これをきっかけとして道南のアイヌが和人に対して一斉に立ち上がった。（蜂起というイメージがあるので使わないほうが適当だろう。）当時和人は、東は鷓川から西は余市に至るまで交通路を持っていたが、族長コシャメインが率いるアイヌが、道南各地の和人の居館を攻撃して、翌年の春には、当時12館と呼ばれた居館の殆どを奪取した。この時、花沢館主蠣崎季繁の客となっていた武田信弘が進んでコシャメイン父子を射殺した為、二館は辛うじて無事なる事を得たと松前家に残る記録にある。信弘はこれを奇縁として茂別館主の娘を娶り、蠣崎氏を継ぎ松前氏の祖となった。

● シャクシャインの戦い

アイヌ民族とシサムとの最大の戦いである。和人の交易上の不正、蝦夷の自由移動並びに交易にたいする制限、松前藩の蝦夷地に対する放任主義などの諸々の要因が乱を拡大したといえよう。（新北海道史）そもそもは、東蝦夷地における染退蝦夷（メナシクル：現在の静内）と波恵蝦夷（ハエクル：現在の沙流地方）との闘争が、始まりである。時にシャクシャインは、染退の脇乙名で、ハエの乙名はオニビシで、共に当時を代表する英傑であった。1648年、酒宴の席でシャクシャインが酔いに任せてオニビシの部下を殺害、これが機に戦いが始まった。松前藩は波及拡大を恐れて和解を図ったが、争いは6年に及んだ。オニビシ優勢のうちにシャクシャインも身に危険を感じるほどになった。そこで、松前藩も両者に和平勧告を為し、暫く争乱は起こらず、1655年には、両者が時の藩主に謁して藩主に対して他意無きを誓った。乙名を殺された染退ではシャクシャインが乙名となり、数年ならずして従前のような勢力を回復し、両雄並び立たずではないが、またしても争いが起きた。次第に対立は先鋭化し、調停も不調に終わり、調停役の和人の所を訪れていたオニビシは、シャクシャインの急襲を受け憤死するに至った。仇を討たんと機会を狙っていたハエの残党は、酒を強か飲んでいたところを襲い、数十人を殺害。軍事援助の申し出を断った藩は、仲裁の労を取り、1669年（寛文9）には双方承諾した。シャクシャインの許には四名の和人がいて、松前藩を滅ぼして諸国通商の利益を独占しようと画策し、為に、松前藩に使者に立ったオニビシの姉婿のウトマサが死んだのは毒殺されたからであるとデマ情報を流布して、オニビシの残党を懐柔した。シャクシャインは、各地に檄を飛ばし、これに呼応して、白糠から増毛に至るアイヌが1669年6月一斉に立ち上がり、松前藩に対する戦いが開始された。幕府は東北諸藩にも出陣の指令を出した。初めはアイヌが優勢であったが、国縫の戦い以降は松前藩が優勢となり、10月には和解の為のテーブルにつく事になった。和議の成立を祝うと称して酒を振舞い、酔ったのを見計らってシャクシャイン以下14名を謀殺した。指導者を失ったアイヌは次第に衰微して、結局は敗北してしまった。

同一民族同士の争いが、悪意を持った者の策謀に乗せられて松前藩との戦いに変質し、為に、アイヌは大打撃を受け和人に抗する力を喪失してしまった。

● クナシリ・メナシの戦い

寛文9年蝦夷の乱以降、松前藩は、和人をなるべく蝦夷地に立ち入らせない方針を

取ったが、奥蝦夷地における交易が盛んになると、あの悪名高い場所請負制もあり、アイヌに対する苛酷な扱い、不公正な賃金支払いなどが横行しており、これが暴発するには一寸したきっかけがあれば十分だった。運上屋から貰った酒を飲んだ乙名の死亡、番屋から食べ物を貰った女夷の死亡から、一斉に立ち上がった。1789年先ず、クナシリ島の人立ち上がり、次いでメナシ（根室支庁管内標津町、羅臼町付近）に人々が立ち上がった。然しながら、これはシャクシャインの時とは違い、組織だったものではなく、暴発的なものであった為に、松前藩の正規軍と戦う前に長老達の説得に応じ戦いを止めた。しかし、戦後処理として、指導者が処刑されたことから、これを不服とするアイヌが暴動を起こした為、全員が射殺された。

この戦いを最後として、アイヌと和人即ちシサムとの戦いは生起していない。

15世紀から18世紀に亘るアイヌとシサムの戦いを概観したが、我が先人達の暴虐ぶりに驚きを感じると共に、民族の共存と共栄の難しさを思わざるを得ない。時は流れ、技術は格段に進歩しても、人間性は殆ど成長していないのかもしれない。勿論、アイヌと和人の歴史には、人間として心温まる交流も多数あった筈だし、暗い面のみを抉り出すのではなく、明るい面にも光を当てるべきだろう。そのことが贖罪になるなどと思っているのでは決してないが…

尚、参考までに、アイヌ人というのは差別用語等の一つに指定されており、アイヌ又はアイヌ民族というべきだ。

(参考:百科事典、新北海道史第二巻通説一、各種のHP)